

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380662

研究課題名(和文) 農業・農村生活の価値づけに関する質的研究法を用いた実証的研究

研究課題名(英文) A Qualitative Interview Research into the Values of Farming and Rural Life

研究代表者

伊藤 勇 (Ito, Isamu)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：90176321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：農業および関連活動に積極的に取り組む人々への半構造化インタビューにより得られた語りの質的分析から、「農」への価値づけを語る言葉の語彙と論理における特徴を見だし、7条項に整理した。その上で、古い言葉に新しく多様な意味を付与する動きとして、「百姓」と「先祖」という2つ言葉をめぐる語りに着目し分析を行って、新しい意味づけのパリエーションと多様の中での共通の方向性を確認した。また、「農」への価値づけに関わる重要な契機の一つとして、個人史上の深刻で劇的な問題経験(エピファニー)を少なくない対象者の間に見だし、その類型化を行うとともに、個人的トラブルから「農」の再認識に至るプロセスを跡付けた。

研究成果の概要(英文)：In this study we conducted a qualitative interview research into the values of farming and rural life among the active rural persons in Fukui Prefecture. Here we report the findings of this research. First, we describe the outline of the main findings by showing the summarized statements of our interviewees' narratives on the values of farming and rural life. Secondly, we point out the fact that some old words have been used to convey new meanings to farming and rural life. Hyakusho (farmer) and Senzo (ancestor) are typical examples. Thirdly, reaffirming the values of farming and rural life seems to be closely related with some problematic and turning-point experiences that our interviewees went through. These biographical experiences, which can be called "epiphanies," seem to have urged our interviewees to reconstruct their world views and life styles. Social crises may combine with the personal troubles to bring deeper reflections and convictions.

研究分野：社会学

キーワード：社会学 農の価値 質的インタビュー調査 事例研究法

## 1. 研究開始当初の背景

現在の日本では、農業や農村の現状と相対的に独立に、「農」をめぐる様々な言説と表象が生産・流布・消費されている。こうした事態は、1990年代以降に顕著になった「新しい農村問題」(または「ポスト生産主義期の農村問題」)と呼ばれる問題状況の重要な局面の1つとして捉えることができる。そして、こうした事態を読み解き関与する上では、都市と農村を含む全体社会の中での、「農」への意味づけ方をめぐった様々な言説や表象のせめぎ合いに着目する視角(「文化論的転回 cultural turn」)が重要になったとされる(秋津, 2007)。

本研究はこうした問題認識や研究視角を共有しながら、特に、村落研究者の間で重要性は認識されつつも近年の状況下での本格的な実証研究がなされていない研究課題、すなわち現に農村に暮らす人びとの立場から農業や農村生活がどのように積極的に価値づけ(意味づけ)され得るのかという課題に取り組みうとした。

農業・農村の持続可能性は今や、都市・消費者・政策・メディア等との交流・連携・協同を抜きには語れないが、緊張や対抗の契機も含む相互関係の中では、農業・農村サイドの主体性確保が不可欠である。その一環として、「農」を価値づける言葉と論理の確保と発信も強く求められている。「地元学」や「田舎学」あるいは「百姓学」といった実践学の提起は、こうした社会的要請に応えようとするものといえよう。本研究は、これら実践学と関心を共有しつつも、社会学研究として、従来の村落社会研究における農業観研究等の諸成果との接続をはかり、言語や意味に焦点を合わせた社会学理論と質的研究の視点や方法を活用して、実証性・学術性を備えた研究成果の発信を目指そうとした。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目標は、農業者・農村生活者の側での農業や農村生活に対する新しい価値づけについて、その語彙(ボキャブラリー)と論理(レトリック)における特徴を明らかにすることである。

(2) 本研究の第2の目標は、新しい価値づけが「なぜ、どのように」形成・展開されるのかについて、当事者たちの生活史上の経験、現在の生活条件、交流関係、メディア接触等との関連を探り、関連の仕方について一定の仮説を得ることである。

## 3. 研究の方法

上述の目的をはたすために、本研究では、福井県嶺北地方において農業や農村関連活動に積極的に取り組み緩やかな人的ネットワークを形成する一群の人びと(年齢、性、経歴、経営等で様々なタイプをカバーするように配慮して有意選択した29名の人たち)

を主要な対象として、「農」への価値づけを多角的に探る半構造化インタビューを実施し、得られた語りについて質的データ分析を行った。

研究目的の(2)については特に、予備調査段階から、個人史上の転機、とりわけ「エピソード(個人史上の劇的問題経験)」と言い得る経験が重要な契機となっているのではないかという見込みを得たため、それを想定した質問を構成してインタビューに臨んだ。

以上のような半構造化インタビュー調査の実施を中心としつつ、本研究では次のような4活動を3年計画において実施することで研究目的をはたそうとした。

実地調査: 農業者・農村生活者側での「農」への新たな価値づけとその条件を探るための半構造化インタビュー、対象の人びとが取り組む諸活動(集落営農、環境調和型農業、農産物直売、産消提携、グリーン・ツーリズム、食育など)および対象地域農業・農村の現況に関する実態調査を実施。

データの分析・解釈: インタビュー記録の質的分析を実施。

文献研究: の分析・解釈に参照・活用するために、「農」の言説・表象研究、農業観や農業価値論、質的分析法の活用例に関する内外の諸文献を検討。

成果発表: 以上の研究成果を、内外の学会等で研究発表するとともに、論文としても公表。

## 4. 研究成果

### (1)「農」への価値づけの概要

調査協力者(対象者)の人たちの語りの多くに共通して見いだされる、「農」への価値づけの語彙と論理を整理・要約すると、以下の7条項にまとめることができた(下線部は対象者自身の言葉遣いを表す)。

農業とは第1に、生きるすべ、生活の基盤である。と同時に農業は、生命(いのち)を育ててそれを自然の恵みとしていただく営みでもある。したがって、百姓としての自負をもって取り組めるやりがいのある仕事だ。

農業の良さ・魅力は、実りの手応え・収穫の喜びがあるところ、自分の責任と裁量で進められる自由さ、他人に指図されない気楽さ、そして、消費者や取引先との直接の交流や反応が喜びや励みになるところだ。反面、天候や技術不足による不作、農産物価格の低迷、変動には泣かされる。

農村生活の良さは、薄れてきたとはいえ、人の情や助け合いの精神が残っているところだ。(具体的には、お裾分け、労働互助、声の掛け合い、災害時の炊き出し、

共同作業などにあらわれる。) 村のつきあいは煩わしく、面倒だが、それを引き受けなければ人情も生まれない。とはいえ、村のつきあい、慣習には、古臭く、封建的で、改めるべきところもある。変えるべきは変えて、風穴を開け、外の風(都市消費者、観光客、新規就農者、移住者、Uターン者、よそ者)を招き入れなければ、農村は存続できない。

農地は、生活・生産の基盤であるとともに、先祖から引き継いだ大切なものである。土地を遺してくれた先祖に対する感謝と尊敬の念は強い。自分たちも手をかけ守ってきたものだから、愛着も強い。次世代に是非とも引き継がれるべきものだ。

一番の望みは、愛着あるこの土地に、家族や、夢を語り合える仲間・友人を支え・よりどころとし、多様な収入源を確保して、住み続けることだ。

## (2) 古い言葉による新しく多様な意味づけ

厳しい状況にもかかわらず農業や農業関連活動に積極的に取り組んでいる人たちの語りには、「農」の価値を再認識するため、旧来の言葉を用いながら新しく多様な意味づけをしようとする動きが顕著に見いだされた。典型的な例として「百姓」と「先祖」が挙げられる。

「百姓」: いま全国的に、積極的意欲的に農業に取り組む人たちの間で、「百姓」という言葉を自覚的に自称として、あるいは、農業の営みそのものを指す言葉として用いる人が増えてきているという(岸, 2009)。今回のインタビューでも予備調査の段階からこの言葉が注目されたので、本調査で質問項目に組み込み全員にその意味合いや評価をたずねた。その結果、対象者の間でも「百姓」が積極的かつ様々な意味を込めて用いられるケースが多かった。かつて否定的な意味合いが強かった「百姓」は、今や、農業者たちの仕事や生き方や自己イメージに対する誇りを示す言葉となっているといえよう。肯定的意味合いで用いられる点は共通だが、その内容は多様でユニークである点も興味深い。つまり、「百姓」は、生産・経済活動としての「農業」とは異なり、地域生活のあり方も含めたトータルな生き方を指すと言われたり、自己の楽しみと社会への抵抗・抗議を意味するとされたり、「百のなりわい」と言い、何でも知っていないとできない「奥の深い」仕事、「自然相手に豊かな仕事」と評価されたり、「百通りの女の生き方」を表すと解されたり、実に多様なのである。なお、若い世代では、「百姓」に敬意を払いつつも、自己イメージとしてはもっと別の独自の

言葉と意味合いで語るケース(例:「農業生産人」、「農業家」)も見られた。

「先祖」: 古い言葉、ありふれた言葉でありながら、「農」を価値づける豊かな言葉、新しい可能性を秘めた言葉ではないかと思われたのは、「先祖」をめぐる語りである。あなたにとって農地とはどのようなものですかとたずねると、生活や生産の基盤ないし拠り所という趣旨の回答が目立つが、その一方で、「先祖代々の土地」という感覚はあるか、「先祖を意識することはあるか」という問いかけには、ほとんどの人がイエスと答える。それらをまとめると、上記(2)に示したように、農地とは、生活・生産の基盤であるとともに、先祖から引き継ぎ、自分の代でも守り続けてきた、それだけに愛着も強い大切なもの、次の世代にも是非とも引き継ぐべきもの、ということになる。日本の伝統的な「家」観念や祖先崇拜の鍵と言われてきた「先祖」は、依然として、農地やその継承を考える際の重要なキーワードとして作用しているように見える。しかし、このことと並行に、「先祖」は、各家のご先祖様という従来の用法を超えて、個々の家・世帯や血縁を横断した地域全体の先人という意味合いをもつ事例も複数現れている。地域の先人の土地を維持・継承しようとする発想に応じた、「先祖」概念の拡大と解され、大変興味深い。

## (3) エピファニーを通じた「農」の見直し

以上のような価値づけの言葉と個人史的な経験との関連については、個人史上の深刻で劇的な問題経験(エピファニー)が価値の再認識に関わるケースが少なくないことが見いだされた。(デンジンによれば、エピファニーとは「当人の個人的性格を照らし出し、しばしば当人の人生上の転換点の兆しとなる問題的经验の時期」(Denzin, 2001)をいう)。

今回の調査協力者の語りに見いだされたエピファニーは次の4種類に分類できた。

本人や家族の病気や死、アイデンティティの危機(例:学卒後の新職場への不適応)、農業以外の職場でのトラブル(例:仕事上の大失敗、上司との不和)、その他(家族関係上の深刻なトラブルなど)。

エピファニーを経験した人は、大変厳しい個人的なトラブルに遭遇して、仕事やライフスタイルや価値観の再考を迫られたこと、再考の中で、農業に目が向くようになり、実際に農業に専心することを通して、農業や田舎暮らしの新しい価値や利点を発見したという。深刻な個人的トラブルが、農業に目を向けさせる重要なきっかけとなっている。そして、農業への専心の中で、ポジティブな生き方や価値観が生み出されてきたと多くの人は語る。

また、かれらの語りからは、農業自体が持

っている啓発力・教育力とでも言うべきものが、かれらに農業に目を向けさせ、再認識させている側面も強いことがわかれた。

農業者、農村住民における価値の再認識の必要性は、農業や農村の危機を背景に生じているが、再認識の動きは、個々人のプライベートな問題経験をきっかけに、問題経験と結びついて発動し活性化する面が強いのではないかと思われる。

#### (4) その他の成果

本研究課題に関連し、村落社会研究における徹底した事例研究法(モノグラフ)やライフヒストリー的手法の意義について、著名な研究者ヘインタビューを行い、記録・注記を学部紀要に発表した。また、アメリカにおける質的社会調査の展開とその示唆について、『社会調査事典』に1項目を執筆した。

#### <引用文献>

秋津元輝, 2007, 「カルチュラル・ターンする田舎」, 野田公夫(編)『生物資源問題と世界 生物資源から考える21世紀の農学 第7巻』京都大学学術出版会, 147 - 177 頁。

Denzin, N. K., 2001, *Interpretive Interactionism* (2nd Edition), Sage.

岸康彦(編), 2009, 『農に人あり志あり』創森社。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計3件)

Isamu ITO, Words and Experiences that Reaffirm the Values of Farming and Rural Life: Findings from Qualitative Interview Research in Fukui Prefecture, Japan, 『日本海地域の自然と環境』(福井大学地域環境研究教育センター研究紀要), No. 22, 2015年, 査読無, pp.91-99

Isamu ITO, Old Words with New Meanings for Reaffirming Farming and Rural Life: Findings from Qualitative Interview Research, *Book of Abstracts (The 5th International Conference of Asian Rural Sociology Association)*, 2014年, 査読有, p.56

伊藤勇, 「庄内農村研究の「方法」と実際(下)」, 『福井大学教育地域科学部紀要』第4号, 2014年, 査読無, 109-146頁。

#### 〔学会発表〕(計3件)

伊藤勇, 「農を価値づける言葉と個人史的経験」, 新社会研究会, 2015年11月2日, 桃山学院大学梅田サテライト。

伊藤勇, 「農村社会学におけるモノグラフ的手法の意義をめぐって」, シカゴ社会学研究会, 2015年9月28日, 京都市第8長谷ビル会議室。

Isamu ITO, Old Words with New Meanings for Reaffirming Farming and Rural Life: Findings from Qualitative Interview Research into Rural Actives in Fukui Prefecture, Japan, 第5回アジア農村社会学国際大会(The 5th International Conference of Asian Rural Sociology Association), 2015年9月2日, ラオス国立大学社会科学部。

〔図書〕(計1件)  
社会調査協会(編)『社会調査事典』丸善出版(全892頁, うち執筆項目・頁, 「アメリカの質的社会調査」(伊藤勇), 714-717頁), 査読有, 2014年。

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

伊藤 勇 (ITO ISAMU)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号: 9 0 1 7 6 3 2 1